

つぼみの一つが花びらを見せた朝、「わあ、きれい」「チューリップの花だよ」と、通園カバンをかけたままのA君が大声で叫んだ。何事かと駆け寄って来た子どもたちは、緑がかつたつぼみの先からのぞいている真紅の花を両手で包みこむようにして顔を寄せ合いい、匂いを代わる代わるかいでいる。みんな一本の花を囲んで身動き一つする子もいない。私も一緒にあって咲き始めた花の香りに浸った。なんでも自分のものにならないと気の済まないB君も、お散歩の時に手当たりしだい草花を摘みとっていたC君も、この時ばかりは手出しをしない。昨日まで緑の小さななきたまりにしか見えなかったつぼみから、まさかこのような光り輝く真紅の花をのぞかせようとは思ってもみなかっただろう。「わあ、真赤だね」「きれいだなあー」一つの花の美しさや甘い香りが、みんなで花を大切にするやさしい心となって幼子たちの心の中に広まっていった。チューリップの歌を歌いながら、どの子もこんな心やさしい子に成長してほしいと思った。

で見てるからはずかしいんだよ」「わあ、お花さんも、毛虫さんもピッカピカ光ってるよ」「本当、きれいだね」「かわいいわねー」と、子どもたちの対話は尽きない。目をきらきらさせ体いつばいに感情を表現しあう幼児との会話から植物や小動物を自分たちと同じ仲間として受け入れようとする態度や感受性の豊かさに改めて感動を覚えた。

これからも身近な環境の中で、躍動する生命の営みのひとこまひとこまに目を見はり、共鳴し、驚き、喜びを共にすることができる心の豊かさをいつまでも持ち続けたいものである。

花を愛する人は、毎朝、花に話しかけるそうである。よく足を運び変化の様子をとらえて手入れをするからこそ見事な花をつけるのだろう。幼児の成長も植物のそれと共通するものが多いのではあるまいか。子どもたちと共に歌い、遊び、走りまわる中で、子どもの行動の小さな変化にも目を配り、問題を早急に見つけ出し、解決するよう心がけている毎日である。教師と園児が一体となって活動する中でこそ、子どもの本当の心が見えてくるものと考ええる。

七月は、子どもたちが丹精込めて栽培しているアサガオの花が咲く季節である。成長の折々にどんな夢をふくらませてくれるだろうか。たくさんの心暖まる会話を今から楽しみにまつてい

る今日この頃である。

(郡山市立喜久田幼稚園教諭)

## 巣立つて

行ったA子

紺野 廣 光



して近づいてくる。その子どもに視線を向けようものなら、たちまち友だちの後ろに体をかくしてしまう。視線をそらすと、またおそろのおそろ体を現わしてくる。

しかし、こうまでして、なぜ先生のまわりに近寄ろうとするのか。やはりこの子どもにも、自分を知ってほしいという願いがあるとは違いない。また、時によっては、相談にのってほしい悩みをもっていることも考えられる。

A子は、授業中でも自分から進んで意見を述べることもないし、活躍する場面も見られない。ただ、先生の話を聞いたり、友だちのすることをだまっで見ているだけである。

こんなA子の心を開くことはできないか。考えていることをこぼしに、行動に移すことのできる子どもにすることはできないか。

学校の休み時間は、子どもたちとの心なごむふれ合いの時間であると同時に、授業中では見ることのできない子どもたちの別の側面を見ることができるとも時間でもある。子どもたちは、休み時間になると、私のまわりを集まっていろいろと話しかけてくる。先生に少しでも自分を知ってほしいと次々に話す。友だちを痛烈に批判する子……しかし、そのかたわらに、必ずといってよい程、友だちの陰になりながらも、だまって友達や先生の話を聞いている目立たない子どもがいる。

A子も、そんな一人であった。いつも友だちの後ろに自分の体を半分かく

休み時間などに、それとなく話しかけるようにした。初めは、かくしていた体を少しづつ現わすようになり、やがては聞かれたことにならずくようにもなった。その変化は、遅々としたもの